



Title	池上先生と私
Author(s)	小山, 登久
Citation	語文. 2004, 86, p. 4-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69069
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

池上先生と私

小山登久

あつた。

それも、何も知らない私は例年のように先生に年賀状を差し上げたが、先生の奥様のお名前で頂いた寒中見舞いのお葉書によって初めて知ったのであつた。

京大の大学院（修士課程）と阪大の大学院（博士課程）での先生の講筵につらなつたのみならず研究上のいろいろな面で御指導を賜り、また大学に奉職してからも折に触れて御示教を賜つた私は、早速、広田阿岐子様（先生の御長女）に連絡し、お許しを頂いて一乗寺の先生のお宅に参上して、先生の御遺影に合掌することができたのは一月の下旬になつてからであった。

先生の御逝去の四、五年前から先生への連絡は一方通行になつてゐた。私は、御老齢の上に長期にわたる奥様の御看病等のお忙しさの故にと思ってさして気にしてはいなかつたが、そのようになつてからも先生はお送りした拙著や抜刷を時々取り出されて見て下さっていたとのお話を、先生の御遺影の前で私は初めて広田

私が池上頼造先生の聲咳に接したのは、京都大学大学院（修士課程）に入学して大学院での先生の講筵につらなるようになつてからである。

私が大学院に入学した頃のある学術雑誌に連載された、「学者評判記」風の研究室探訪記事に池上先生について、
①穏やかな笑顔のうちにも時にキラリと光る眼の厳しいこと。
②講義中にノートしにくいこと。
③逸話のないのが逸話であること。
というようなことが書かれていた。

これは右の研究室探訪記事による先生のプロフィールの三点セットということになるが、この追悼文が表題のような個人的な回想の形式を探らざるを得なかつたのは右の③のせい（故）でもある。この拙文を読まれる方々の御寛容を願う次第である。

恩師池上頼造先生は昨年の十二月十四日に逝去された。

私がそのことを知ったのは今年の一月も下旬になつてからで

様から承ったのであった。

私は再度御遺影を仰ぎ見た。それは端正で穏やかなうちに、かつて講義中に時にお見せになった、あの静かな厳しさを秘められた御遺影であった。

昭和三十五年四月、前述のように京都大学大学院文学研究科修士課程国語学国文学専攻に入学を許可された私は、初めて京大の諸先生の講筵につらなることになった。

私は母校の愛媛大学の国文学科の卒業論文で上代特殊仮名遣の違例の問題を扱つたが、大学院の入学試験（筆答試験）の後の面接の時に遠藤嘉基先生から、今後もこのような上代特殊仮名遣の研究を続けるつもりなのかということを尋ねられたので、そのつもりでいる旨を申し上げると遠藤先生は、もっと発展性のある方面の研究に切り換えた方がよいのではないかということを諄々と説かれた。また、私が入学して初めて濱田敦先生の研究室に御挨拶に伺つた時に、濱田先生はこのことについて「わたしなら中世をやるね。」とおっしゃった。

入学当初から私は文学部の文科閲覧室で過ごすことが多かった。当時の文科閲覧室の書庫にはおびただしい数の研究資料が収められていたが、ぱっと出の私にはどのような資料がどのように配置されているのか全く知らなかつたので、閲覧室備え付けの索引を引いては研究資料を書庫から探し出して閲覧室で見ながら、これから何を研究したらよいのかを模索する日々が続いた。

ある日、書庫で研究資料を探していると、池上先生が入つて来

られて「どうですか。大分慣れましたか。」とお声を掛けて下さった。

その頃、池上先生は大学院で「語史考証」の講義をしておられて私もその聴講者の一人であったが、その講義では私の知らないかった研究資料がいろいろと取り上げられた。

その中の一つに公家日記などの記録資料があつて、先生が「記録語」の研究については史家の側からの辞書的な研究があるだけという現状であると講述されたことに強く関心を抱いた私は、その研究を思い立つた。

後日、池上先生の研究室を訪ねてその旨を申し上げて御指導をお願いすると先生は、国語学研究の立場から言えば、記録資料は当時、まだ未開拓の分野に所属して研究者も非常に少なく、また何よりも資料の正確な解読が大変難しい問題であることなどを諄々と説かれて、「非常に困難な分野に進むのだということをよく承知した上で始めるように。」とおっしゃつた。

このようないきさつで「記録語」の研究から始まつた私の記録資料についての研究は、その後、池上先生の「文体の変遷」（『岩波講座日本文学史（第十六巻）』）の御論考の影響を受けて、いつしか記録資料の「文体」の研究へと転じていつた。

この間、昭和四十一年四月に私は大阪大学大学院文学研究科修士課程国文学専攻に入学を許可されて、今度は阪大の大学院で先生の講筵につらなることになった。

私が初めて学界誌に論文を投稿することになった時に、その下

書きを御覧になつて先生は一言、「論文の冒頭の部分が印象的。」とおっしゃつた。それは、序文抜きでいきなり本題の問題点に入つていった書き出しの文章についての御批評であつたが、私が先生からお褒めの言葉を頂いたのは後にも先にもこの一言だけである。

先生は御研究の方面だけではなく、御自身の健康についても日頃からよく注意されておられた御様子であった。先生がまだ京大の国文研究室で副手をしておられた頃であったか、先生の御学友の一人のアドバイスに従つて、その方のコーチを受けて初めてテニスのラケットを握り、澤鴻久幸先生も袴の股立を取りられて池上先生と御一緒にラケットをお振りになったとのこと、また、練習の結果、池上先生はなんとかボールを打ち返せるようになられたことなどを私に話されて、平素、少しでも運動をすることを勧められた。

かつて宮地裕先生が『語文』第三十三輯に掲載の「池上禎造教授の退官にあたつて」の中で池上先生のことを、「(前略)人がらはごく散文的なかただが、生きかたは多分に詩的なかたのようにも思われる(以下略)。」と書いておられたが、確かに散文的でない一面をお持ちであったと思う。

五年ばかり前のことになるが、所用で府立総合資料館へ行けたために京都へ出掛けた折に、先生のお宅にお伺いして先生にお目にかかることができた。その時は先生が現代語の中の漢語の研究についての学界の現状などを話題にして、かれこれ一時間近く話さ

れた。先生のお宅を辞去して、お宅が見えなくなる道の曲がり角まで来てふと振り返ると、先生がお宅の前の道まで出られたまま佇んでじっと私を見送つて下さつていてことに気付いた。その前年に先生のお宅をお伺いした折は、たまたま先生の御家族の方がお宅に来ておられた時であったので、先生も御家族の方と一緒に私を見送つて下さつたが、そのようなことはあまりなさらない先生が、しかもお一人でずっと見送つていて下さつたので、私は大変恐縮して深く一礼すると先生も礼を返された。それ以後そのことがずっと気にかかっていた。そしてそれが先生にお目にかかることができた最後であった。

今はただ先生の御冥福をひたすらお祈りするばかりである。

—岐阜女子大学客員教授—